

れい わ 令和 7 (2025) 年度 ねん ど

じん けん しゅう かん き ねん さく ぶん しゅう
人権週間記念作文集

ひょうご にゅうしゅう さく ぶん けい さい
(ポスター・標語入賞作品掲載)



3年

いた み し いた み し きょういく い い ん かい
伊丹市・伊丹市教育委員会

“差別を許さない都市宣言”

すべて国民は、日本国憲法において、基本的人権に基づき自由と平等が保障されている。にもかかわらず、いまなお、差別を受けて市民的権利が不完全にしか保障されていない事実のあることは、断じて許されないことである。まさに部落差別の解消は、行政の責務であり、同時に国民の課題である。

同和問題の解決を行政の最重点施策とする本市においては、市民もまたみずからの課題であるという認識を深め、部落差別を解消するため、市民ぐるみの実践に努めなければならない。

本市は、ここに全市民の願いをこめて、部落差別をはじめとするいっさいの差別に終止符を打ち、明るく住みよいまちづくりを推進するため、“差別を許さない都市”とすることを宣言する。

昭和 50 年 11 月 1 日

伊 丹 市

目 もく

次 じ

《作 さく》

文 ぶん》

優秀 ゆうしゅう

一人 ひとり じゃない

弟 おとう の得意 とくい なこと

平和 へいわ のために今 いま ばくが出来る でき 事 こと

ふつうとは何 なん だろう

いのちの重 おも さ

あす あさ まで明日 あした 後 ご 日を過 す せる幸 しあ せ

ありのまま

秘密 ひみつ

誰 だれ かのせいではなく自分 じぶん から

心 こころ のグローバル か 化

佳作 かさく

三年 さんねん

六年 ろくねん

六年 ろくねん

六年 ろくねん

一年 いちねん

一年 いちねん

一年 いちねん

三年 さんねん

三年 さんねん

三年 さんねん

《ポ
ス
タ
ー
》

優秀
ゆうしゅう

入選
にゅうせん

佳作
かさく

《標
ひょう

優秀
ゆうしゅう

入選
にゅうせん

佳作
かさく

《語
ご

二に 二に 一いち 一いち 六ろく 三さん 一いち 一いち 三さん 五年
年ねん 年ねん 年ねん 年ねん 年ねん 年ねん 年ねん 年ねん 年ねん 年ねん

.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....

46 45 43 40 39 39 38 38 37 37 36 36 35 35

作^{さく}

佳^か 優^{ゆう} 文^{ぶん}

作^{さく} 秀^{しゅう}

優秀

一人じゃない

三年

私は、二年生になったばかりのころ、学校に行くのがいやになりました。行く前も帰ってきてからも、毎日なみだが止まりませんでした。友だちにいやなことをされたわけではありません。学校がきらいだったわけでもありませんでした。だから、お母さんもびっくりしていました。一年生の時からずっと楽しく学校に行けていたのに、どうしてこんな気持ちになったのだろう…。とにかく不安な気持ちといやな気持ちでいっぱいでした。

私は、一年生のクラスのみんなと先生が大好きでした。クラスのみんなともだちでした。でも二年生になってはじめてのクラスがえて、知らない子もたくさんいて、きゆうに不安な気持ちが大きくなりました。ふだんは気にならない小さな出来事がすごく気になったり、トイレがとても近くなったり、きゆうにないたりするようになりました。先生にしつ問したいことも、思うように聞けなくて、よ計にわからなくなつて、頭がいっぱいになることがふえていきました。お母さんと話し合つて、その時の心にある気持ちを全て話しました。お母さんは、「大じょうぶだよ。気にしなくていいよ。」とはげましてくれたけど、よ計に

小さなことが気になってしまいました。

お母さんが先生に相談してくれました。私のじょうきようを全部話してくれました。そこから、先生と日記のやりとりをするようになりました。ふ安なことや何か気になったことは日記に書いて教えてねと言ってくれました。一年生の時のたんにんの先生と話すきかいても作ってくれました。話してスッキリしたようなほっこりしたようないい気分でした。「また話そうね。」と先生は言ってくれました。

しばらくつらい気持ちがつづいたけど、学校は休みませんでした。友だちにもがんばって話しかけて、少しずつ楽しい時間がふえました。お母さんに「今日

は楽しかったよ。」と言える日がだんだんふえていきました。そうしているうちに、ふ安な気持ちが少しずつきえていったように思います。三年生のはじめもふ安になることなく、すごすことができました。

その時に私が一番強く思ったことは、「一人じゃない」ということです。お母さんもいてくれるし、先生も私の気持ちによりそってくれました。一人でなやんでいたらぜったいにかいけつできなかったと思います。学校でも先生が「大じょうぶ？」とやさしく声をかけてくれることが、とてもうれしかったです。心ばいしてくれている人がいること、私を思ってくれている人がいること、私の大きな

味方^{みかた}がいるんだと思える^{おも}ことで、気持ち^{きもち}がとても強くなれた^{つよ}ような気が^きします。だから私は元気^{げんき}な気持ち^{きもち}をとりもどして、楽しい^{たの}い今^{いま}があるんだと思^{おも}います。

もし、これから、私^{わたし}と同じ^{おな}ような気持ち^{きもち}ちや立場^{たちば}の人^{ひと}がいた時^{とき}、だれかにたすけをもとめたり、味方^{みかた}にな^なってくれる人^{ひと}がいるかんきようであれ^あばいいなと思^{おも}います。家^{いえ}でも学校^{がっこう}でも「一人^{ひとり}じゃない」と思^{おも}える気持ち^{きもち}が心を強^{つよ}くしてくれるきばうだと思^{おも}います。しんどい気持ち^{きもち}にな^なった分^{ぶん}、学^{まな}んだその思^{おも}いをわすれず、だれかの味方^{みかた}にな^なれる人^{ひと}になりたいと思^{おも}いました。



弟の得意なこと

六年

僕の弟は、自閉スペクトラム症だ。弟には苦手なことが他の人よりも多くある。まず、突発的な音だ。車のクラクションなどいつなるかわからないものが苦手だ。次に、気持ちの切り替えだ。思い通りにいかないと、切り替えができて、そのままひきずることが多い。そして、コミュニケーションだ。会話が一方的になったり、相手の感情を読み取ることが難しく、会話が苦手だ。

ある日、家族で買い物に行った時、弟が欲しかったおかしが無くて、大泣きしていた。切り替えがでずにそのまま泣

きながら家に帰った。その帰り道で、大人がこつちをジロジロと冷たい目線で見てきた。それは、まるで、何百台もの防犯カメラのように感じた。その中には、ヒソヒソとこつちを見て何か言っている。それにとってもイライラした。「泣いているだけでなぜ、こつちを見てくるの？」なぞでしかたなかった。心の中は、複雑な気持ちのモヤモヤしかなかった。そのモヤモヤの事をお母さんに話したら、「弟が自閉症だとわかってないんじゃないかな。」と言った。たしかにそうだ。自閉症は見た目では、わからない。ただの小学生が大泣きしていると思われているのだろう。けど、だからと言ってジロジロ見たり、ヒソヒソ話すのはちがうと

思った。

そのモヤモヤを晴らしてくれたのは、僕の学年の友達と野球のチームメイトだった。学校での出来事だ。業間休みの時、弟がこけて、泣いていた。僕は、弟にかけつけた。その時、僕の友達もかけつけてきてくれて、「大丈夫か?」「保健室行く?」など、いろいろ声をかけてくれた。とても嬉しかったし、みんなやさしいなあと思った。次に、野球での出来事だ。試合で負けた時、応援していた弟が大泣きした。そんな弟にチームメイトが「くやしいけど次勝つからな!」「次の試合も応援きてな!」と話してくれて、弟は泣きやんだ。この時、「なぜ友達やチームメイトの方がやさしいんだろう。」

と思って考えることにした。僕の考えた答えは、友達や野球のチームメイトは、弟が自閉症だと分かってくれている。しかし、買い物に行った時、ジロジロ見てきた人たちは、弟が見た目だけだと、自閉症だと分かっていたいなかったからだと思っった。その事をふまえて、またお母さんと話をした。すると、お母さんは、「最近は学校でもハンディキャップを持った人の事を考える授業があるから、みんな、やさしさや思いやりがあるんじゃないかな。」と言った。でも、分かっているから、ジロジロ見たり、ヒソヒソ話す大人の人たちはちがうと思っった。

その後、自閉症について調べてみると、一部の人が「自閉症の人は、何も一人で

できない。」^{おも}と^{おも}思^{おも}っ^{おも}て^{おも}い^{おも}る^{おも}こ^{おも}と^{おも}が^{おも}分^{わか}か^{わか}り^{わか}、
おどろいた。^{にぎ}苦^{くる}手^てな^てこ^ては^てた^てく^てさ^てん^てあ^ある^あ
け^あど、^あ僕^{ぼく}の^{ぼく}弟^{にい}は、^{ぼく}僕^{ぼく}よ^より、^{こく}国^{こく}名^{めい}と^{こく}国^{こく}旗^きの^き
知^ち識^しは^しす^すご^ごい。^お弟^{にい}は、^{よう}幼^{よう}稚^ち園^{えん}の^{とき}時^{とき}か^から^か「^く九^く」
を^{こた}答^{こた}え^える^えこ^こと^こが^こで^でき^きて^てい^いた。^お弟^{にい}は^{なに}何^{なに}
も^もで^でき^きな^ない^いわ^わけ^けじ^じや^やな^ない。

^お弟^{にい}の^およ^よう^うに、^じ自^じ閉^{へい}症^{しやう}を^も持^もつ^も人^{ひと}は、^{なん}何^{なん}人^{にん}
も^もい^いる。^{でも}でも、^お弟^{にい}の^およ^よう^うに^{なに}何^{なん}も^もで^でき^きな^ない^い
わ^わけ^けじ^じや^やな^なく、^{にぎ}苦^{くる}手^てな^てこ^てと、^{でい}得^{でい}意^いな^なこ^こと^と
が^がは^はつ^つき^きり^りし^して^てい^いる^るだ^だけ^けだ。^{ぼく}僕^{ぼく}だ^だつ^つて^て苦^{くる}
手^てな^なこ^こと、^{でい}得^{でい}意^いな^なこ^こと^とは^はあ^ある。^{だから}だ^だか^から、
^じ自^じ閉^{へい}症^{しやう}の^{ひと}人^{ひと}と^とそ^そう^うじ^じや^やな^ない^い人^{ひと}、^{かん}関^{かん}係^{けい}な^なく
接^せし^して^てほ^ほしい。^{そして}そ^そし^して、^{だれ}誰^{だれ}か^かが^が泣^ない^いて^てい^い
た^たり、^困困^くつ^つて^てい^いる^る人^{ひと}が^がい^いた^たら、「^何何^{なに}、^{この}こ^{この}
人^{ひと}」^{という}と^{いう}冷^{つめ}たい^冷視^し線^{せん}で^み見^みる^るん^んじ^じや^やな^なく
て、「^{だい}大^{だい}丈^{じやう}夫^ふか^かな^な？」^とと^あ温^{あたた}か^かく^く見^み守^{まも}つ^つて^てく

れる人^{ひと}が^が多^{おほ}い^い世^よの^{なか}中^{なか}に^にな^なつ^つて^てほ^ほしい。



平和のために今ぼくが出来る事

六年

僕は今年、平和学習のため、広島に行きました。戦後八十年という事もあり、平和について改めて考える時間になりました。

最初に原爆ドームへ行きました。原爆ドームを見たしゅん間、ショックを受けました。こわれたかべやガラスのない窓、そして飛ばされた屋根にしようげきを受けました。それが原爆のい力を物語っていました。

資料館で忘れられないのは栄養失調で赤いはん点がたくさんでている女の子の写真でした。なぜならこの平和学習で広

島に行く前に『火垂るの墓』という映画を観た時に、その映画に出てくる四才の女の子の節子がこの写真の女の子と全く同じで体に赤いはん点ができ、栄養失調で亡くなった場面を思い出したからです。僕はこの作品が作者の戦争体験を元に作られたとお母さんから聞いたけれど、アニメだったのでどこか信じられずにいたけれど、実際に女の子の写真を見て、それは八十年前、本当に日本で起きたことなんだと考えると、胸がぎゅつとしめつけられ、悲しくなりました。

僕は三年間アメリカに住んでいます。その時に第二次世界大戦で使用されていた戦艦が展示されている資料館に行きました。そこには、アメリカにとって

その戦争は『正義の戦い』として説明されていきました。アメリカも自国の安全や国民を守るため、そして原爆投下は、日本とアメリカ両方の命を救うため早く戦争を終わらせるためだったと書いてありました。

僕はどちらの国の主張が正しいとか間違っているとかは分からないけれど、原爆投下で多くの命がなくなった事、苦しむ人達がたくさんいたこと、僕の想像をはるかに超えることが八十年前の日本では本当に起きたこと。その事実間違いないけれど、僕がアメリカで過ごした時に感じた事は、みんな優しく、親切で、日本はとても良い国だと言ってくれたり、日本の文化に興味をもってくれたり

と、昔、戦争していたなんて信じられませんでした。

ただ、どんな理由があっても、人の命や幸せをうばう戦争は絶対してはいけないということははっきりと言えます。人の命はみな平等で、誰にもうばう権利はありません。

今でも世界の一部では紛争が起きています。どうして平和がさげばれている中で、争いがなくならないのか不思議でありません。世界で唯一の被爆国として、八十年経った今も後遺症に苦しんでいる人達が多くいること、どれだけの人の命や当たり前の幸せを奪ったのか、世界中の人々に知ってほしいです。

今、私達に出来る事は戦争を経験して

きた方々が少なくなる中で、戦争の事を
忘れないこと、よく知ること、感じるこ
と、今、自分が平和に向けて何が出来る
のか考えること。友達と仲良くする、
困っている人を助ける、世界で起きてい
ることを知ることが悲げきをくり返さな
い、今、僕達が出来る第一歩だと思いま
す。



ふつうとは何だろう

六年

最初にこの本のタイトルを見た時、家での母と姉のやり取りを思い出ししました。

母が「こういう時ふつうはこうするでしょ!」と言えば、姉は「お母さんのふつうと、私のふつうを一緒にしないで!」と言って反論します。それを横で聞きながらいつもは深く考えませんが、改めて「ふつうって何だろうなあ」と考えました。

そもそもふつうはだれが決めたのでしょうか。例えばインド人やアフリカ人は大抵手でご飯を食べます。でも日本では

おはしで食べるのがふつうなので、日本で手で食べている姿を見ると違和感があります。おはしで食べないといけないという法律はないけれどそこには確実に「ふつうはこうするものだ」という考え方があります。つまりふつうというのは世界共通ではなくて、生まれた環境や育った環境が関係しているのだと分かります。けれども母と姉のように親子の間でもふつうの感じ方は違うし、親が同じ兄弟姉妹でも違います。ということは、人にとっての「ふつう」は性格と同じで人それぞれあるということだと思えます。

自分の周りの友達でいうと、仲いい子はきっと私が思うふつうとその子のふつ

うが似ているからだと思います。また世界に話を広げると、争いごとや戦争は互いのふつうだと思ふ事が違って起こるのかもしれない。

本では主にLGBTについて書かれました。読んでいくうちにトイレや制服、修学旅行の部屋割り、更衣室など学校生活でも色々と困る場面があると書かれていて「そういうことがあるのだ、考へもしなかった」と思いました。性のあり方は服装などの見た目だけでは分からないものだということを強く思いました。

本に「知ることはいつか身近なだれかを助ける力になるかもしれないし、社会のあり方や自分の生き方を考えるきっかけ

けになることもある」と書かれていました。LGBTの人の気持ちは本人でないと分からないだろうし、理解するための一番の近道は、その人を知ろうとすること、そして何が嫌なのか、何がうれしいのかを想像することなのだと思います。

誰が「ふつう」で誰が「ふつうではない」のかという区別はなく、どのような性格にも言えることなので「ふつう」という言葉にとらわれず、その人らしさや自分らしさを大切にできる人になりたいです。

そのためには、不要かもしれない男女分けを意識する。人が傷つくような言葉は言わないようにする。自分のふつうを一方的に押し付けない。このようなこと

を日常^{にちじよう}からもっと考^{かんが}えて行^{こう}動^{どう}していき
た^{おも}いと思^{おも}います。そうす^{だれ}れば誰^いも嫌^{いや}だと思^{おも}
わ^{おも}ない、居^い心^{こころ}地^ちい^い場^ば所^{しょ}に^して^いけ^ると
思^{おも}います。



いのちの重さ^{おも}

六年^{ろくねん}

私が生まれた時、体重はとても少なく、まわりの人達^{ひとたち}はとても心配^{しんぱい}したそうです。でもお母^{かあ}さんは、私^{わたし}をだいた時、とても重^{おも}いと感じ^{かんじ}たと言^いっていたことを覚えて^{おぼ}えています。

どんな動物^{どうぶつ}や人間^{にんげん}や生きものでも、最初^{しよ}は、小さいけど成長^{せいちょう}したら大きくなりま^すす。でもどんな生きものでもそのじゆ命^{いのち}はそれぞれで長く生きるものがあれば短^{みじか}いいのちの生きものもあります。

私は、いのちは長い方がずっといいと感じ^{かん}ていました。長い方^{ながほう}がいろんな経験^{けいけん}ができるし、好きな場所^{ばしょ}やいろんな人^{ひと}と

会^あうことができると思^{おも}っていたからです。でも最近^{さいきん}は少し考^{かんが}えが変わ^かってきま^した。

短い^{みじか}いのちであつても、その人^{ひと}や生きものがどんな人生^{じんせい}を歩^{あゆ}んでいたかが大^{だい}事^じなのかなと感じ^{かん}じます。

最近^{さいきん}テレビで、小さいころから病^{びょう}氣^きでずっと入院^{にゅういん}生活^{せいふ}をしている子^こどもの番^{ばん}組^{ぐみ}がありま^した。病院^{びょういん}の中^{なか}の学^{がっ}校^{こう}に通^{かよ}つていて、学^{がっ}校^{こう}に在^ある時^じ間^{かん}が一^{いち}番^{ばん}楽^{らく}しいと言^いつていたことを思^{おも}い出^だしました。私^{わたし}は、学^{がっ}校^{こう}に行^いくのは当^あたり前^{まえ}のことだと思^{おも}っていたけど、そうじゃないというこ^ことを知^しりました。世界^{せかい}にも学^{がっ}校^{こう}に行^いきたくても家^{いえ}の手^て伝^{でん}いで学^{がっ}校^{こう}に行^いけない子^こどもたちがいっぱいいることを知^しりました。

た。

私は自分がいまできけることをもう一度
ふりかえることが大切だと思いました。
勉強もそうですが、友達とのコミュニ
ケーションやお家の手伝いなどひとつ
とつに意味があります。それはいのちが
あるからできることです。

お母さんがとても重いと感じた言葉
は、どんないのちでも重くて、いろん
な人生があることを意味しているのかなと
感じています。

いのちの重さは、生きていく中で、考
えていくテーマです。自分を大切にして
生きていく喜びを感じることでできれば
と思っています。ふだんあまり考えるこ
とはなかったけど、いのちの重さについ

てまた家族と話し合っていきたいです。



明日明後日を過ごせる幸せ

一年

かつて日本も行っていた戦争。日本は今年で終戦から八十年が経ち、戦争とはかけ離れた生活を送ることができています。ですが、現在も世界ではさまざまなところで戦争が起きています。戦争とは、国や集団の間で意見が衝突し、武力を使って争うことです。戦争では、明日も明後日も当たり前のように生きられるという保証がなく、いつでも空襲などから逃げられるように警戒し、不自由な毎日を送っていていかなければなりません。今、平和な日々を過ごせる私たちは、戦争の恐ろしさを感じたこともありませ

ん。そんな私たちにできることは戦争について学び、戦争を防ぐと努力するにとだと思っています。

私は最近、「あの花が咲く丘で君とまた出会えたら」という映画を観ました。その話是一九四五年、第二次世界大戦の特攻隊員の話です。私は登場した特攻隊員たちについてびっくりしたことがあります。それは何かというと、隊員がほとんど二十代であったこと、その中に十七歳の隊員もいたことです。実際に調べてみると、特攻隊員の平均年齢は二十一歳で、最年少が十七歳でした。特攻隊は、搭乗員が爆弾を搭載した航空機などで敵の艦船や航空母艦を目がけ体当たりをし、敵の戦闘機などを

破壊し、撃沈させる作戦を行う部隊のこ
とで、搭乗員の多くは生還を前提とせず、
死を覚悟して行かなければいけなかった
のです。その特攻作戦により戦死した隊
員はおよそ六千四百人。十七歳から三
十二歳までの若く、未来のある若者たち
が、明日も明後日も、これからを笑って
過ごすことが許されず、命を懸けて敵に
突っ込んでいくことはとても覚悟のいる
ことだったと思います。私はその話を聞
いて、とても苦しく、悲しく思うと同時
に尊敬の意を感じました。私なら死を覚
悟して行くことなんてできないし、いつ
までも笑って楽しく過ごしたいと思いま
す。彼らもそうであったはずだと私は思
います。時代もかなり違い、遠い存在に

感じやすいですが、彼らも私たちと同じ
人間であり、死が怖くないわけがない。
明日明後日を当たり前のように過ごした
い、いつまでも家族や好きな人と楽しく
生きていきたい、そう思っていたにちが
いないと思います。それは特攻隊員でな
い人たちも同じだと思っています。この映画
では、焼夷弾という爆弾が落ちてくる
シーンがあり、小説版では、おじいさん
が貫かれてしまうシーンがあります。急
にやってきて、不意に落ちてきた爆弾一
つでその人の明日が簡単に奪えるほど、
戦争がある時代の命はガラスのように脆
く、軽いものに見られていて、とても残
酷な世界だったんだなと思いました。他
にも、色々な戦時中の生活が感情面まで

もリアルに表現されていて、より一層戦争の残酷さ、恐ろしさを感じました。

戦争は、社会への影響が大きく、戦争による怯えから生じたトラウマなど精神的にも深く傷を残します。他にも、食糧不足による飢餓状態や、空襲による焼死や、戦場での死闘の末の戦死。罪のない、無関係な人々が多く、無差別に殺されてしまいました。全ては国家の争いによるものであるのに、関係ないこれから生きていく人、明日も明後日も笑顔と幸せに包まれて過ごせるはずだった人たちが大勢を巻き込み、幸せや平和とは程遠いものに包まれ恐怖の中生きていかねばならない状況にした戦争は、二度と繰り返してはいけない過ちだと思いました。日本

軍が行った捕虜や大量虐殺。ナチスドイツによるユダヤ人迫害。多くの国が行った徴兵。広島や長崎への原爆投下。沖縄戦での強制的な集団自決や、住民を巻き込んだ戦いによる多くの民間人の犠牲。これらは本当に多くの人々の生存権や自由を奪った最大の人権侵害だと私は思います。戦争とは、それだけ多くの犠牲者を生み、多くの無関係な人々を苦しめた、二度と繰り返してはいけない過ちです。これらのように、戦争はたくさんの人を苦しめ、明日自分や家族が当たり前のように生きていけるといふ生活から離れ、恐怖に包み込みました。私たちが今、平和に当たり前のように明日や明後日を生きられるのは奇跡に近く、とても恵ま

れていて幸せなことです。そんな戦争せんそうについて、私たちは深く学び、忘れず生活せいふしていくことが大切たいせつだと思います。そして、この戦争せんそうがもう二度と起おこらないように、もう二度と辛い思いをする人ひとがないうように努めるつとめることが必要ひつだと思おもいます。戦争せんそうは身近なもので例えると喧嘩けんかです。喧嘩けんかは多くの人ひとが経験けいけんしていると思おもいます。戦争せんそうは喧嘩けんかが大きくなったもので、喧嘩けんかと戦争せんそうは近いものだと思おもっています。私わたしたちにできることは、日頃ひじょうから友達ともだちや人ひと、命いのちを大切たいせつにして、喧嘩けんかをしないことです。その先に平和へいがあると信しんじて、これから私わたしは友達ともだちや家族かぞく、命いのちを大切たいせつにして生きていきたいです。



ありのままで

一年

僕は小さい頃から、可愛いことや可愛いものが好きでした。スポーツも全然できなくて、男子から遊びに誘われても、迷惑をかけてしまうので、あまり遊びにはいきませんでした。どちらかというと、自分の好きなことは女子と合っていました。例えば、絵を書くことや、折り紙を折ること、買い物や推しのグッズと一緒に楽しむことが多かったんです。でも、男子から見ると違和感があるように「男子なのに可愛いものが好きとか、なんか変で気持ち悪い。」や「ノリ悪いね。」「いつも女子と一緒にいるね。」などと言

われたりしました。

確かに僕は言われる通り、可愛いものが好きだし、女子と一緒にいる時が多いかもしれません。ですが、その何がいけないのかとずっと思っていました。男子は男子と、女子は女子と一緒にいなくてはならないルールなんてあるのでしょうか？わからないです。

先日、僕は小学校の時の仲の良い友達と一緒に買い物をしていました。サーティワンアイスを食ったり、推しのグッズと一緒に開封したりしました。とっても楽しかったです。その友達は女子でした。このことを別の男友達に話しました。すると、「付き合ってるの？」と聞かれたので、「付き合っていないよ。友達だ

よ。」と答えると、「え？男子なのに、女子とお出かけするなんて、おかしくない？」と言われました。その言葉にさらに疑問を抱きました。

なぜ女子と一緒に歩いただけなのに、付き合つてと思われるの？女子と遊ぶ事の何がいけないの？男子は男子と遊ばないといけないの？などの怒りのような、悲しみのような、なんともいえない気持ち湧いてきました。でも、僕はそんな勝手な偏見に惑わされず、性別関係なく好きなことは好きなようにしたいです。それが変だと思う人達をできるだけ減らしたいです。

男子はこうあるべき、女子はこうあるべきという思い込みは、今も少なからず

続いているところがあると思います。そういう偏見にとられず、本当の自分を隠さないで、ありのままの自分を見せていくと、相手はこれが普通なのかなと理解してくれるかもしれないので、それも偏見をなくす一つの方法だと思うので、僕もありのままの自分を見せていこうかと思います。

ここ最近ではジェンダーレスが進んできて、偏見を持つ人は昔に比べて減ってきているようで、少し生きやすい世の中になってきていると言われています。その証拠に、小学生の時、僕は絵の具セットやプールバッグ、手提げ袋など可愛いものを選んできました。でも、友達はそのれを受け入れてくれていて、昔の時代よ

りも理解が進んでいるようでありがた
かったです。個人の性格、興味や関心の
あることによって、友情の形がいろいろ
異なると言う事が、もっと世の中に知れ
渡ると嬉しいなと思います。



秘密

三年

小学生の時、私にはとても仲の良い女の子がいた。その友達とは気遣いのできる優しい子で、友達も私より多かった。私は毎日その子と、休み時間や放課後に一緒に遊んでいた。ある日、その子は腕にあざをつけて登校してきた。私が、

「どうしたの？その腕。」

と聞くと、その子は、

「なんでもないよ、大丈夫。」

と答えた。気にならなかったという嘘だが、なんでもないというならば、なんでもないのだらうと深く聞かなかった。その日からひと月ほど経った日、その子

は「誰にも言わないでね」と私に相談を始めた。私はその話を聴いたとき、すごく驚いた。その子が「親にたたかれることがある」と言ったからだ。あの日の腕のあざはそういうことだったのかと納得した自分がいた。話に一区切りがついたとき、その子は私に

「ほんとに誰にも言わないでね、〇〇にだけ言っているの。」

と念をおした。私は力強く

「わかった！」

とうなずいた。

腕の告白をされてあまり間もない頃、学校で配られた「保護者による暴力」についてのプリント。私はその子のことが真っ先に頭に浮かんだけれど、言わない

で」と言っていた。だから私はその紙の「特に相談することはない」という欄に丸をした。後日私は先生から人気の少ない場所へ呼び出された。なんだろうと思しながらその場所へ向かった。先生からの話は私の友達のことだった。

「あの子が親からたたかれたことをあなただけには言ったと言っていたけれどこれは合っている?」

と聞かれたから

「はい、少し前に聞きました。」

と答えた。誰にも言わないで守っていた私だったけれど、彼女が先生に相談できて、私の名前を出していたから隠す必要はもうないと考えたからだ。その後、先生から

「どうして私たちに相談しなかったの?」

と優しい口調で問われた。私は先生に彼女のことを言わなかったことを怒られるかとも思っていたので少し驚いたが、迷いながら

「彼女に言わないでと言われていたからです。私は彼女との約束を守りたかったのです。」

と返すと、

「もう大丈夫よ。教室に戻っていいわ。」

ありがとう。と先生は言った。教室に帰った私は考えた。私は約束を破ってしまったかもしれないと思ったからだ。一方で、もっと早く先生に私から相談することを彼女が望

んでいたのではないかと思う私がいた。自分では相談できないからと。しかし、言えは彼女から「どうして言ったの、言わないでって言ったのに。」と責められるかもしれないと考える私もいた。そのような考えが頭の中でぐるぐる回りどうすればよかったのか分からなくなっていた。

今、このような状況になれば迷わず先生へ私は相談するだろう。中学生になつてから別の友達に「もしも」の話としてこのことを相談したことがある。その友達に先生に言う派だった。理由を聞いてみると

「その子は苦しんでいるかもしれない、限界がきたから自分に相談してくれたの

かもしれないから。」

と言った。私が

「誰にも言わないで、と言われているのに言うの？」

と聞くと

「約束破って嫌われるよりも、言わないで傷つき続ける方が嫌だ。」

と返してくれた。自分の中にこの言葉がスツと入ってきた。私もそのように思っ

たから、私は今なら先生に相談したい。

私が過去にとった選択に後悔はない。彼女が先生に相談できたからだ。自惚れだ

と思うが私が約束を守ったから周りの人に話す勇気が出たと考えた。しかしこれは結果論だ。結果が悪くなかったため後

悔はないが、もし似たことがあれば何も

しないまま傷つくのは嫌だ。そのために
コミュニケーション能力を上げ、自分が
相談を安心してできる人を増やしていこ
うと思う。コミュニケーション能力を上
げるために様々な人と関わり、多様な考
え方を身に付けていきたい。また、彼女
のように親からの暴力を受けてしまった
人が減るように、私は人の些細な表情の
変化にも気がつける人になりたい。



誰かのせいでなく自分から

三年

私はいつもいろいろな仮面をかぶっている。本当の私でいたいのになかなかその仮面を外すことができない。そんな風におもったできごとが二つある。

一つめは周りの意見にあわせてしまうこと。中学生になってクラスの中でよくないあだ名がとびかっている。その人にも非があったのかもしれない。でも、誰にだってその人を大切に思っている人がつけてくれた大事な名前がある。それなのに私はクラスの子をよくないあだ名で呼んでしまった。その人の友達だと思われたら自分もきらわれてしまう。そんな

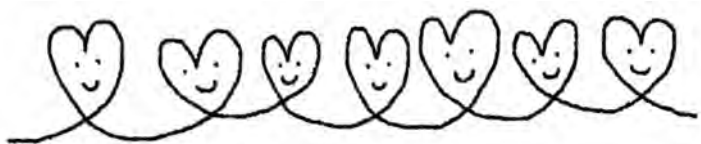
考えがあつていつしかその人を避けてあだ名で呼ぶようになった。私はその人のことが正直苦手だった。でもよくないあだ名で呼ぶことに対しては抵抗があつた。それなのに声をあげることができなかった。声をあげなかった。よくないことだと分かつていたのにもかかわらず、見て見ぬふりをしてしまった。

二つめはマスクを外せないこと。マスクの着用が義務づけられた時、マスクはあついしつけたくなかった。でも、マスクを外してもよくなったあの日、外したとは思わなかった。中学に入学してからほとんどの人がマスクを外すようになった。もちろん体育の時などは外す。でもコロナが始まる前の生活に戻るこ

がなかなかできない。外せない理由も特にはない。一つだけあるとするならば、周りの子にきらわれないため。今までマスクをしてきて急に外したら、思ってた顔ではなくがっかりさせてしまうかもしれない。仲良くしてくれていた子が離れてしまうかもしれない。そんな恐怖からいつまでたってもマスクを外せない。本当は自分の思ったことを言いたい。性格も本当の私でいたいしマスクだって外したい。でも、今の私がそれをできないのは周りの子を信用しきれていないから。自分のことを受け止めてくれないと勝手に決めつけてしまっているから。本当の自分を出せないのを周りのせいにしてしまっている自分がどうしてもゆるせ

ない。仲の良い子さえも信じきれない。でも変わりたい。今の自分のまま卒業したくない。変わるために頑張ることは二つある。一つは周りを信じること。そのためにもっと沢山の人とコミュニケーションをとっていききたい。もう一つは自分に自信をもつこと。自分を見つめ直し、改善できることは改善し自分にみがきをかけてアップデートしたい。同じ学校の中にも私と似た意見・考え方を持っている子がいると思う。その人たちにも周りの人にもいい風が吹くようにまずは、自分自身が変わっていききたい。周りに合わせる方がいいという考えではなく、みんな違ってみんないい。そんな考えがより多くの人に伝わってほし

い。一人ではむずかしいけれどみんなと協力すればいつだって変えることができる。そのため私は自分のつけている仮面を外して生きていきたい。



心のグローバル化

三年

最近、私たちは外国人に関するニュースを耳にする。残念ながらその多くは日本で窃盗や詐欺などの犯罪を起こしたというものだ。SNSには、「〇〇人は怖い」、「外国人はこれだから」と投稿される。だが今ひとつ考えてみてほしい。マスコミによって切り取られた一部分で彼らをまとめ上げても良いのだろうか。

現在、約三千六百万人超えの外国人観光客、そのうちの二百万人は労働者として来日している。大阪万博もあるせい、以前よりも多くの外国人を街中でよ

く見かける。私の住む伊丹市でも英語表記や外国人店員を目にする。そして彼らに関するニュースが報道されたとき、世間は大きな主語で外国人を批判するような声をあげる。その原因としてSNSの発達が挙げられる。私たちが想像で作りに上げてしまった彼らに対する偏見が、ここでは共感をせざるを得ないような形で切り取られ、アップされている。確かに外国人が騒動やマナー違反を繰り返し、被害や迷惑を被るお店も少なくない。だからといって一部の人の行動でその国の人全体までが批判されるのは、人権が守られていないのではないだろうか。一人一人に人権があり、その権利は侵されてはいけないものにも関わらず、日本

人ではないという理由だけで攻撃しているようだ。以前は私も同じような偏見に共感することがあった。だが、私たちの人権は守られるのに彼らの人権はなぜ守られていないのか、同じ日本に住む者としてその人権は守られるべきではないか、と考えたその日から、考えはガラツと変わった。

反対に我々日本人が他国を訪れたとき、どのような行動を取れば良いか。一番はその国のルールやマナーを知り、迷惑をかけることが重要だと思う。世界にはたくさんの文化や法律があり、「知らなかった」で許されないのが実態だ。だからこそ私たちが他人の家に行くように、お互いが不快な思いを抱かず、かつ

その国でも「日本人はこれだから」と考えられることのない言動や行動を心がけるべきだと思う。

以前、テレビで外国人に対するインタビューが行われたとき、「日本の文化に触れたくて留学してきました」、「日本食がとてもおいしく、良いところだ」と答えている人がいた。それを聞いてとても嬉しく、まるで自分が誉められているかのような感じがした。私のように自国に誇りを持つことは大切であり、もっと日本について知ってもらいたいとも思う。世界には日本に興味があったり、日本を好きになりたいと思う人がたくさんいる。おかげで戦後の日本とは比べものにはならないほど観光業が栄え、日本

佳作

「ごめんね」の力

二年

いつも声をかけてくれるおばあちゃん

四年

「ぼくが生きているふたつの世界」を読んで

六年

否定

一年

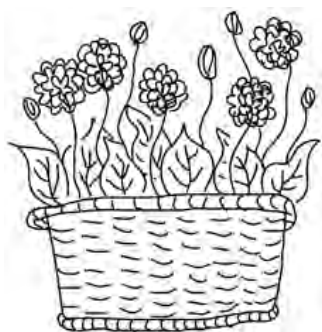
共存していける社会を目指して

二年

平和を伝えていくこと

三年





ポ
ス
タ
ー

佳^か 入^{にゅう} 優^{ゆう}

作^{さく} 選^{せん} 秀^{しゅう}

優秀
ゆうしゅう



五年
ごねん



三年
さんねん



いちねん
一年



いちねん
一年



さん ねん
三年



ろく ねん
六年

一年
いちねん



一年
いちねん



二
年



二
年



佳^か
作^{さく}



さん ねん
三年



いち ねん
一年



に ねん
二年



よ ねん
四年



に ねん
二年



に ねん
二年



標^{ひょう}

佳^か 入^{にゅう} 優^{ゆう} 語^ご

作^{さく} 選^{せん} 秀^{しゅう}

優秀ゆうしゅう

知ることは

多様な理解の

第一歩

気づくこと

それが最初の

やさしさだ

あいさつと

感謝の心は

自分から

「大丈夫」

それはホントに大丈夫？

考えてみよう

相手の気持ち

あいさつは 心を開く 第1歩

日々感謝 周りの支えが 今の自分

SNS 指で一瞬 傷は一生



あなたでいい よりも嬉しい あなたがいい

「当り前」

変えていくのが

新世代

その言葉

発する前に

のどフィルター

育てよう

相手を思う

優しい目

思いやる

その心があれば

世界は変わる

佳作

見てみよう スマホじゃなくて みんなの心

ネット民 人の尊さ 考えて

人と人 つながりつくる あいさつで

思い込み 相手も自分も 苦しめる

やってみよう 隣の人から 大切に

ネットの情報じょうほう

ホントに真実しんじつ？

思い込みおもひこ？

言葉ことばにする前まえ

一呼吸ひとこきゅう

挨拶あいさつは

社会しゃかいをつなぐ

思いやりおもいやり

やさしさで

言葉ことばをつむげ

その心こころ

心こころはね

見みえないからこそ

大切たいせつに

へい　わ　と　し　せん　げん 平　和　都　市　宣　言

へい　わ　ひと　い　おおもと　せんそう
平和は人が生きるための大本です。戦争はかけがえの
いのち　うば　しあわ
ない生命を奪い、幸せをふみにじります。

せ　かい　おそ　かくへい　き　むご　せん
いま、世界は恐ろしい核兵器をなくし、惨たらしい戦
そう　しやかい　あゆ
争のない社会をつくろうと、ようやく歩みはじめました。
こころ　せんそう　ひと　こころ
が、ここで心をゆるめてはなりません。戦争は人の心の
なか
中にひそんでいるのです。

じんるい　しあわ　わ　あ　ちきゅうかんきょう　じ　ゆう
人類が幸せを分かち合える地球環境をつくり、自由と
じんけん　とうと　さ　べつ　ひんこん　へい　わ
人権を尊び、差別や貧困をなくすことも、すべて平和の
もんだい
問題です。

わたし　し　みん　へい　わ　しやかい　きざ　ちか
私たち市民は、平和な社会を築くことを誓い、ここに
へい　わ　と　し　せんげん
平和都市を宣言します。

へいせい　ねん　がつ　にち
平成2年11月10日

い　たみ　し
伊　丹　市



5年

さべつ ゆるさないせんげんとし いたみし
「差別を許さない宣言都市」伊丹市

— 人権週間記念作文集 —

令和7(2025)年11月

編集・発行 伊丹市・伊丹市教育委員会